

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話：070-1503-6401、044-988-0004

<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>

第 90 号

宗像・沖ノ島関連遺跡群世界遺産認定への動きについて思う (2)

====安易な認定は日本文化の本質を曲げてしまう====

宗像大社・沖ノ島のもつ大切な意味とは

前号では、世界遺産認定への動きがある福岡県の沖ノ島について少し考えてみました。今回は、沖ノ島の持つ意味をもう少し深く考え、日本文化の原点についても考えてみようと思います。

神体島(島そのものが「神」と考えられている島)である沖ノ島は一般の人の島への立ち入りは許されていません。現在も古来からの女人禁制が堅く守られています。唯一、年に一度、5月の大祭の日には宗像大社に許可を得て島に入ることができます。島に入る場合は、沖津宮(沖ノ島で祀られている神社)の社務所近くの浜辺で海水に身を浸けて禊(みそぎ=海や川で身を洗い清めること)をおこなわなければなりません。また、決められた所以外の立ち入りは禁止され、落ちていた石や遺物は勿論のこと雑草一本でも持ち出すことはできません。

島の中腹まで登ると、縦横高さが十数メートル程の巨大な岩が多数転がっている所が現れます。ここが古代原始信仰の姿をそのまま残している貴重な遺跡群で、この巨岩群こそが神の依代(よりしろ=神霊が招き寄せられ乗り移るもの)であったのでしょうか。考えてみて下さい、このくらい大きな巨岩がいくつもごろごろしている姿は、まさに小型のビルが色々な方向を向きながら林立している光景です。古代人が自然への畏怖や敬意を醸成させるには最も適した場所であったに違いありません。この時の古代人の心情こそ、やがてシャーマンが巨岩の頂に座し、神の降臨を感じ、祭を執り行う絶好の場であったはずで、古代日本人の信仰形態はこのような環境から生まれてきたのでしょう。

さて、判明している主な遺跡は島の中腹で、約 120m x 140m ほどの広さの場所に約 13 個の巨岩が無造作に散らばっています。時代は約 5~7 世紀頃でしょうか、その岩上や岩陰、あるいは露天に約 23 箇所の遺跡が散在しています。そして、そこには無数の土器や須恵器が腐葉土に隠れたり露天で風雨に晒されているのです。5 箇所の岩上には祭祀の後と思われるような形跡がそのまま残存しています(写真 A)。また巨岩の岩陰には青銅鏡・鉄剣・車輪石・玉等が見られます(写真 B)。これらの遺物は、中国製の青銅鏡、朝鮮半島の百濟(4~7 世紀)・新羅(4~10 世紀)製の馬具や金銅の龍頭(写真 C)、中国唐代(7 世紀~9 世紀)の唐三彩、ササン朝ペルシャ(3 世紀~7 世紀)のカットグラス等も発見されており大陸との関係が強く窺われます。



写真 A 巨岩上の祭祀跡

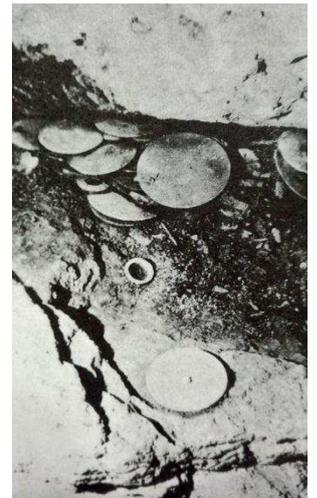


写真 B 岩陰で発見された遺物



写真 C 朝鮮の新羅産と思われる金銅製龍頭

このように沖ノ島には日本の奈良時代以前の古代原始信仰の姿が今日までそのままの状態に残っており、日本文化の原点を垣間見ることができるという貴重な遺跡であるわけです。さらには古代の中国・朝鮮半島・ペルシャなどシルクロードとの強い関わりを知る重要な手がかりとなる存在でもあります。

したがって、沖ノ島は世界遺産としての価値は十分に認められる場所と考えられます。しかし千数百年にも渡ってこの場所を守ってこられたのも古事記・日本書紀の時代から神域として守ってきた宗像大社のご苦労があったものと思います。そして玄界灘という厳しい自然環境や掟、タブーの存在があったからだだと思います。

この文化的環境が世界遺産認定によって崩されるということは決して言い過ぎではないと思っています。価値観の相違によって貴重な文化や文化財が壊されるという事は、今までも多くの例がありました。例えば日本の武道文化を象徴する柔道がそうでした。オリンピック競技になり、国際化することによって単なるスポーツと化し「道」の部分や「形」の美が失われ、レスリングに近いものになったといわれることの無念さ。相撲は千数百年間神事としての歴史を歩みながら相撲文化を伝えてきました。現在でも地方には神事としての「相撲」が存在し人々によって継承されています。相撲の「四股(しこ)」「塵手水(ちりちようず=取り組む前の清めの儀式で蹲踞し、拍手した後、両手を左右に開き手のひらを上に返す動作)」「弓取り」「塩撒き」「力水(ちからみず)」等みんな、古来からの神事に関わる動きです。今、相撲においても国際化への歩みが進み始めています。文化遺産にする武道にしる、その中にある文化としてのアイデンティティーを常に意識したいものです。同時に「国際化」「近代化」という言葉のマジックに翻弄されず、日本文化の中にある意味を十分理解しながら後世に伝えていきたいものです。

(参考資料:「古代祭祀とシルクロードの終着地」神泉社) (文:板倉)

←新しくホームページが開通いたしました。どうぞ活用ください。なお旧ホームページのアドレスも残っていますのでご注意ください。

シリーズ

「麻生の歴史を探る」第 60 話

麻生の寺院(10) 妙福寺その2

小島 一也 (遺稿)

妙福寺は、現麻生区内の寺ではなく、町田市三輪町に在りますが、この地は、室町・天正の頃は麻生郷に属し、近世、神奈川県都筑郡から明治 22 年東京府南多摩郡鶴川村となり、昭和 33 年 (1958) 町田市三輪となったもので、この寺の檀徒は、その昔、生活圏を同じくした鶴見川流域の現横浜市の寺家、成合、鴨志田町、そして、麻生区の上・下麻生に及んでいます。

この妙福寺の由緒を町田市史 (下巻) で見ると、市域に今も残る「七堂伽藍」の名刹として、「一に小山田の大泉寺」「二に三輪の妙福寺」「三に本町田の宏善寺」を取り上げ、大泉寺は鎌倉時代の有力武将、小山田氏の菩提寺 (第 26 話) で、本町田宏善寺 (日蓮宗) は、宗祖日蓮聖人が文永 8 年 (1271)、龍の口での法難の際、この井出の沢の小庵に休息した伝承を持つ名刹で、妙福寺はこの 2 寺に比する古刹と述べています。

この町田市史での所以を新編武蔵風土記稿 (以下風土記と略記) の記述で見ると、「日蓮宗、荏原郡池上本門寺の末、長裕山と号す、本堂十間に七間半、本尊三宝を安す、開山詳ならず、寺宝 釋迦像一軀日蓮の作なり、木造三寸五分、十界曼荼羅一幅是も日蓮の筆なり、祖師堂三間に四間、日蓮の木像長三尺を納む、鐘楼二間四方、鐘は天和三年 (1683) 鑄しもの、番神堂二間に三間、三十番神は小像にして長八寸許、惣門 高麗、濡門とも呼び幅九尺・・・」。七堂伽藍を記しており、現在残る本堂・客殿・庫裏は江戸時代に何度か修繕された建築 (寛永十二年 1635 火災あり) で、櫻木、檜、杉などの巨木の建材は今も利用され、重厚、荘厳な伽藍になっています。

中でも「祖師堂」寛文十二年 (1672)、池上本門寺から御下賜のもので、桃山時代の仏教文化を伝える貴重な遺構として、東京都重要文化財 (昭和 36 年) に指定されております。「鐘楼門」は、延享三年 (1746) 建立の、楼上に梵鐘を掲げた、重厚なくぐり門形式の珍しい楼門で、町田市有形文化財 (昭和 59 年) を受けており、山門 (嘉永七年 1854 建立) も、高麗門と称される貴重な建築で、町田市の有形文化財となっています。惜しいことに、正徳五年 (1715) 建立されたとする「番神堂 (=1 日から 30 日までの法華經の守護神を祀る社)」は、昭和初年に朽ち、文化財指定はありませんが、現在はその昔の茅葺風の、優美な銅板葺きが建立されており、又、天和三年 (1683) 鑄造の梵鐘 (三輪の地で鑄造の伝承あり) は、第二次大戦で供出させられましたが、昭和 38 年 (1963)、人間国宝、香取正彦氏によって、富山県の老子で製作され、現在、その福音を近在に響かせています。



妙福寺祖師堂



祖師堂内陣



妙福寺鐘楼

なお、この寺の特徴は、風土記の謂う寺宝、夥しい仏像、書画、什器を蔵していることで、日蓮聖人御直筆の曼陀羅 (仏の功德の書画)、聖人書簡軸、釈迦如来坐像 (室町時代作)、日蓮聖人座像 (承応二年 1653 銘) など、多くの仏像があり、その多くは、木造、彩色、玉眼で、江戸時代造立の銘があり、曼陀羅仏画、人物画、花鳥図の軸には、縦 179 cm、幅 72 cm 余の大型のものもあり、私も平成 2 年 4 月妙福寺開山 600 年遠忌の際、拝観しましたが、その数は夥しく、現在、本堂内陣には、その一部の襖絵が飾られています。

この妙福寺が創建されたのは明徳二年 (1391)。新田義貞の鎌倉攻めによって鎌倉幕府が滅び、この地方では、王禅寺の等海上人が禅寺丸柿を奨励した伝承 (応安三年 1370) の頃で、室町時代も早期といえるこの時期、何故、誰によって創建されたのか、風土記は「開山、開基を詳らかにせず」としてはいますが、その後の調べ (現住職渋谷辨要師) で、この地の地主、長裕、妙福の夫妻が、池上本門寺の名僧「日億上人」に土地を提供、長裕山妙福寺を創建したもので、長裕、妙福の俗は分かりませんが、鶴見川流域には鎌倉御家人以来有力農民が多く、日蓮が池上に没して 100 余年、これらの氏族が法華經に帰依して不思議はなく、檀徒の無い所に寺は建ちませんから、長裕、妙福は、当時、三輪の里に居を構えた、麻生郷の有力農民の「長」だったのではないのでしょうか。

開山大慈院日億上人は、永享三年 (1431) 81 歳の高齢で没し、開基長裕妙福の遺徳を偲んでの墓碑が、平成 2 年住職渋谷辨要師により建立され、応仁の乱、戦国時代を経た法灯は今も引き継がれています。

参考文献: 「町田市史」「新編武蔵風土記稿」「妙福寺開山六百年」「ふるさと三輪」

編集者注: 妙福寺は前稿第 59 話でも触れていますが、独立稿がありましたので、再掲いたします。

シリーズ

時間と時計の話 第 1 部

和時計と西洋時計 (5)

小林 基男 (柿生郷土史料館専門委員)

◆時鐘の正確性◆

江戸時代の日本では、全国各地で時鐘や寺鐘が時を告げていたのですが、ここで考えなければいけないことがあります。時の鐘は正確だったのだろうかということです。江戸は早くも 17 世紀中ごろには、北京を抜いて世界最大の都市になっており、18 世紀の初めには人口 100 万人を超えていたのです。ちなみに西欧最大の都市と言われたロンドンの人口は、1701 年 (18 世紀初) ではようやく 50 万人に達したところでした。

江戸時代最初の時の鐘は、2 代将軍秀忠の時代に、江戸城内の西の丸で撞かれていた鐘を、より庶民の近くにと、日本橋石町 (こくちょう) に移したのが始まりです。その後江戸市中のあちこちに増設され、全部で 9 つの時の鐘が設けられました。石町以外に、浅草、上野、本所、横川町、市ヶ谷八幡、目黒不動、赤坂田町、四谷天竜寺の 8 か所です。このうち浅草の時鐘は今も浅草寺境内に、上野寛永寺の時鐘もまた今も変わらず精養軒の脇に保存されています。

また江戸の町には、人口に比例するかのように、多くの寺院が建てられており、その多くが鐘楼を備えていたのです。時の鐘や寺の鐘がバラバラに撞かれていたのでは、町中の人々が混乱します。しかし、江戸の川柳が語っているのは、「石町は 江戸を寝せたり 起こしたり」とか、「石町の 鐘はオランダ まで聞こえ」とオランダ商館の使節一行が江戸での滞在先としていた長崎屋をオランダに例えて囃したり、鐘の音が乱れて困ったというような、川柳には絶好の光景は、1 句も読まれていないのです。芭蕉もまた、「花の雲 鐘は上野か 浅草か」と、のどかに耳を澄ませている情景を詠んでいます。

さて江戸の人たちは、いったいどうやって時の鐘を撞く時刻を決めていたのでしょうか。言うまでもなく相互に電話連絡など出来ない時代です。その上不定時法の時代です。何で時を計っていたのでしょうか。正午の時間は太陽の南中時で良しとしても、日の出と日の入りの時刻は、高台と低地では違ってしまいます。そこで、「眼前に手をかざして、薄明かりで見え始める時刻、見えなくなる時刻」と決めたのです。それでも、天候によって明るさは違います。そうしたことから、自然条件に左右されない、一種の時計を用いていたのです。もちろん機械時計ではありません。日本橋石町の鐘楼堂や大阪の釣鐘屋敷、寛永寺や浅草寺などは、そろって大きな香時計を用いていたのです。

右の図を見ていただきたいのですが、一間四方もある大きな香時計が使われていました。香時計は一種の火時計です。四角い大きな香炉風の入れ物の中に粉末の香で「コ」の字の線を書いてゆくの。蠟燭や線香は、風の影響を受けないようにしておく、燃える速度は一定です。ですから、こうして準備した粉末の香の端に火を点けると、その火は一定の速度で燃えてゆきます。そこで燃える速度に合わせて時刻点に印を打ち、時刻点ごとに子、丑、寅…と記した香串を立てておき、それを眺めて時の鐘を打つことにしていたのです。

工夫はもうひとつありました。夜通しの寝ずの番は辛いものです。そこで、香串に火が回ると大きな鈴が鳴って落ちる仕掛けが考案され、じっと見張ってなくても、時刻が分かるように工夫していたのです。欧米でも、たとえば奴隷の競り市などで、蠟燭の火が消えるまでを競りの時間とするなど、決められた時間を計るために蠟燭を用いたことが、知られています。当時としては、香時計は正確であると考えられていたのです。時報や時鐘は、かなり正確に時をつけていたのです。

◆機械時計の伝来◆

ところで、ヨーロッパの機械時計はいつごろ日本にもたらされたのでしょうか。種子島に漂着したポルトガル人が、日本に鉄砲をもたらしたことは、良く知られています。船乗りが必ず時計を積み込んでいたことは、この連載の第 1 回でも触れました。彼らが機械時計を舟に積んでいたことは間違いのないのですが、残念ながら当時の報告書に、時計の記録は残されていません。初めて、日本に機械時計を持ち込んだのは、キリスト教の布教目的で日本にやってきたフランシスコ・ザビエルです。1549 年に来日したザビエルは、西国の実力大名大内義隆から布教の許しを得ようと、山口を訪れた際に、望遠鏡やメガネと共に掛け時計 (まだ置き時計はなかったのです) を献上したことが記録されています。残念なことに、この時計は大内氏の滅亡と共に焼失してしまったのか、現存しておりません。

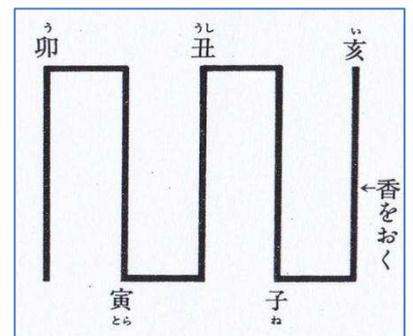
(続)



浅草の時の鐘 (浅草寺境内)



上野の時の鐘 (精養軒の脇)



香時計の仕組み図

第 3 回史跡見学バスの旅が終了

9 月 17 日 (木)、甲州路の史跡見学「武田家ゆかりの寺社巡り」は、雨模様をものともせず 40 名の参加を得て、事故もなく、好評のうちに終えることが出来ました。

今回の目玉、甲州最古の寺院である放光寺では、先代住職自ら、寺の由緒や寺宝について、懇切丁寧に説明して下さい、おおいに知的好奇心をくすぐられました。



武田家の菩提寺の恵林寺を見学、古民家風の完熟屋本店で、あつあつのほうとう御膳昼食、そして午後は躑躅が崎館跡の武田神社、江戸時代の甲府城跡、甲斐善光寺、東光寺を見学と、非常に欲張ったコースでしたが、みなさん頑張って最後までおつきあいいただきました。アンケートにも貴重なご意見をたくさんいただきました。どうもありがとうございました。



武田家の菩提寺の恵林寺を見学、古民家風の完熟屋本店で、あつあつのほうとう御膳昼食、そして午後は躑躅が崎館跡の武田神社、江戸時代の甲府城跡、甲斐善光寺、東光寺を見学と、非常に欲張ったコースでしたが、みなさん頑張って最後までおつきあいいただきました。アンケートにも貴重なご意見をたくさんいただきました。どうもありがとうございました。

柿生郷土史料館 11・12 月催物案内 【入場無料】

◎開館日：奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月 4 回)

11 月 8・15・22・29 日 (毎日曜日) **12 月** 5・12・19 日 (毎土曜日)

◎開館時間：午前 10 時～午後 3 時 (12 月 26 日は休館です)

第 58 回 カルチャーセミナー

『江戸名所図会』を楽しむ

現在、特別企画展で展開中の『江戸名所図会』を開いて、江戸時代後期の庶民の娯楽と生活文化、そして心のあり様について、具体的な絵で確認しながらお話しいたします。

講師：水谷 剛 氏 (日比谷図書文化館特別研究室 ナビゲーター)

日時：11 月 22 日 (日) 午後 1 時 30 分～ 会場：柿生郷土史料館特別展示室

第 59 回 カルチャーセミナー

鶴見川流域文化探訪 8

入門 鶴見川流域史 5(中世編その 3)

鶴見川流域史を古代・中世・近世で考えるシリーズ第 5 弾

いよいよ中世編の締めくくりです。後北条氏の領国統治の中で、統治される側の人々の生活はどのようなものだったのか、掘り下げて考えてみます。

講師：中西望介氏 (戦国史研究会会員)

日時：12 月 19 日 (土) 午後 1 時 30 分～ 会場：柿生郷土史料館特別展示室

第 9 回 特別企画展

「江戸名所図会」に見る江戸と川崎

江戸名所図会は幕末に近い天保年間に刊行された江戸並びに近郊の川崎、横浜、大宮、船橋などを含めた町の地名由来や、名所を紹介する観光案内書です。同時に寺社仏閣の由来から祭礼風俗にまで及ぶ記述は、単なる観光案内を超えた貴重な文化風俗資料になっています。

今回は初版本全巻揃いを、千代田区立日比谷図書文化館のご好意で拝借して展示いたします。

期間：10 月 31 日(土)～1 月 10 日(日) 会場：柿生郷土史料館特別展示室

ついに完成！

ふるさと柿生の記憶を DVD 化

第 1 弾

「身近にあった信仰の世界と人々の思い」

◆◆◆晩秋の上麻生「秋葉講」を訪ねて◆◆◆

ご希望の方にはおわけしております。詳しくは資料館までお問い合わせください。